

この「先進農業事情」は、各地で意欲的に農業に取り組んでおられる人々を紹介するページです。稲作・畑作そして酪農・畜産の分野で、自分の意志で選んだ農業に誇りを持ち、従来のやり方に独自の工夫を施して営農されている方々です。



乾燥機やもみすり機(ヤンマーACH60)などがズラリと並ぶミニライスセンター内部

さらに等級を上げるため色彩選別機も導入するなど、一連の作業体系を充実させ顧客を集めている。米の7割は岩手南農協に出荷(管内で初のフレコン出荷)し、全農経由で福岡の生協や大阪・高島屋などに販売。
また、米の新しい販売戦略として3年前、仲間8人で両警資源循環型農業研究会を結成。コスト低減と良食味を目的に「ひとめぼれ」を豚・牛・鶏の3種混



俊さん・律子さんご夫妻。愛車JD6100の前で



飼養している黒毛和牛



JD6100でペールを生産

一方、祖父が40数年前に始めた和牛繁殖は、俊さんの代で、気に30頭まで増えた。

仔牛生産に実力発揮 品種改良にも意欲

合堆肥で栽培する研究に取り組んだ。さらにネーミングや米袋でも若者らしさや付加価値を付けようと「ラ・グレイス・ア・サ(仏語で土の恵みの意)」の独自ブランド名で商品化し、昨年10トンを埼玉の穀物卸会社に出荷。今年には特別栽培米として生産、首都圏での販路拡大を目指す。さらに、自家産米で造った米焼酎「花の泉」を7年前に埼玉の清龍酒造(株)と共同開発(通信販売中)。また、「花泉のふるさと応援隊」や「岩手県人会埼玉支部」と組み、今秋、大きなイベントを計画するなど町の活性化に力を入れている。



須藤さんは3haの田が被災。内1.7haは作付けできない。

被災を免れた田ではJD1620で代かき作業

高級ブランド和牛「いわて南牛」の素牛(磐井牛)としてセリに出すが、俊さんはJAの仔牛市場販売ベスト10に毎月名を連ねる常連だ。「肥育農家に評価される市場性の高い仔牛を生産を目指しています。そのために自分の目利きで優良な母牛を鹿児島や岐阜から導入し、30頭の約15頭の育種価の高い母牛からの採卵(ET)にも挑戦し、優秀な子牛を生産しています。そうした子牛は肥育農家からの人気が高く、高値で売れるという。「以前に仔牛を販売した肥育農家に『枝肉にした時の結果はどうでした?』と聞くとい値で売れたと皆喜んでくれてます。『今日もいい牛を持ってきたので買ってください』とセリ場でも営業し、利益を上げてきました」と自信を見せる。日常の管理は2.5haで放牧を行っている。さらに2年前には20代の繁殖農家4人(親牛100頭、子牛60頭)で花泉飼料生産組合を立ち上げ、WCSの請負も含め100ha以上で飼料作物を栽培する。「ここ数年、農業機械や資材に数千万円

FAN FAN YANMAR

機械の情報はヤンマーの三浦部長が持って来てくれるので困りません。有利な補助事業や各地の成功事例も教えてくれるので、頼りにしています。



育苗ハウスで、ヤンマー・三浦部長と苗の生育ぶりを確認

もの大きな投資をしました。10年経っても30代後半、まだやり直しがきく。チャンスは今しかないと考えたからです。日本人の主食であるコメを生産するのは喜びであり、誇りです。若者の感性を活かし、「カッコイイ」と思われるような農業をしていきたいですね。俊さんの挑戦はまだ続きそうです。



経営規模:稲作37ha(内農作業受託5ha)、転作(牧草、飼料用米、ホールクローブサイレージ(WCS))11ha、水稲育苗苗土700トン、水稲苗生産1万箱、ミニライスセンター、和牛繁殖30頭、牧草地5ha、稲わら生産販売

若き後継者が果敢に夢に挑戦!

米から和牛繁殖、育苗土・水稲苗販売、作業受託まで

3代3夫婦で大規模複合経営を多彩に展開



左から、父・和弘さん(51歳)・ふみ子さん夫妻、祖父・誠さん(70歳)・良子さん夫妻、俊さん(28歳)・律子さん夫妻。父は息子が営業で不在中も田や牛をしっかりと管理

その一角、花泉町で、70歳でもまだまだ現役の祖父母を筆頭に子・孫の3代3夫婦で、米を主体に和牛繁殖や育苗土などを組み合わせた複合経営を大規模に行っている須藤さん一家。従業員やパートの手を借りながら、家族6人の息の合った分担・連携作業で、代かきや田植え作業に精を出し、散在する百枚以上のほ場を効率よく次から次へと仕上

東日本大震災によって東北の内陸部も、沿岸地域ほどではないがかなりの被害を受けた。岩手県の最南端、安定した気候と北上川の清冽な水が潤す大地に恵まれて米やリンゴの栽培が盛んな一関市の須川パイロット地区を中心に田畑がひび割れや地滑りを起こし、パイプラインも損傷した。それでも復旧に何とかメドが立ち、農家は胸をなでおろしている。

若い仲間も結集する ニューリーダー



ヤンマーコンバイン GC695 で収穫作業

「地震に負けずに、僕ら若い仲間が頑張つて地域の農業を守り、次世代につなげたい」。力強く語る俊さんは、担い手として期待される地域の若手のリーダー格だ。勉強熱心でエコファーマーや家畜人工授精師等の資格を持ち、JAいわて南の青年部や4日クラブ(副会長)などで県内外の同世代の農家と積極的に交流し、常に情報交換を行っている。そうした活動を通して絆を強めていった若い仲間達とは、何かあった時に互いに作業を手伝うだけでなく、新しい取り組みにも一緒に挑戦しているという。「最終的に力になるのは仲間です。同世代や後輩を集める力はいらない」と、須藤一家とお付き合いの長いヤンマー農機販売(株)東日本カンパニーの三浦勝志部長は目を細める。

上げていく。とりわけキビキビと精神的に動き、実質的に経営の中核となっているのが、須藤家の16代目となる孫の俊さん(28歳)だ。岩手県立農業大学卒業後、実家で就農してから7年経つ。

若者の感覚活かした 商品づくりに挑戦

祖父と父が築いてきた経営基盤を継ぎたいと、俊さんは若い感性を活かした様々な試みにチャレンジする。例えば、メインの稲作ではコスト削減技術の疎植栽培を代々採用しているが、俊さんは苗をどこまで減らせるか限界に挑戦中。現在14箱でも慣行栽培で20箱使うのと同じ収量を確保。これには、販売もしている自家製の育苗土「須藤の土」(焼土・殺菌済み・肥料混合)による効果も大きい。透水性と保水性のバランスがよく、根張り・生育が良好なのが特徴。40年来の実績と信用で、550人以上の顧客に年間計約700トン(17万5000箱)を販売する。面積にして875ha分。「30年以上のお客様も多数おられ感謝しています」と須藤さん。併せて稲の苗も1万箱を生産。半分は自家用、残り半分は販売用だ。2年前には念願のライスセンターも完成し、昨年は約45ha分を受託した。



育苗土プラント。町内の赤土をベースに盛岡市玉山の黒土を2割混ぜ、それをバーナーで消毒し8ミリ網でふるう